

特集

自然を生かし地域をつくる

—環境・コミュニティー創造専攻(社会学科)がひらくフィールド—



108.7.7.
Ariake

対談 渡辺豊博・高田研

都留の魅力と私たちの役割

—社会学科 環境・コミュニティー創造専攻に着任して—

都留文科大学地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

題字 黒部行子

絵 成瀬洋平 (本学卒業生)

特集・自然を生かし地域をつくる

—環境・コミュニティー創造専攻（社会学科）がひらくフィールド—

〔対談者の紹介〕
高田研氏：兵庫・大阪での小中学校の教員や、国立社会教育施設の指導職員など、幅広く教育実践の現場に立つ。岐阜県にある「森林文化アカデミー」で教授をつとめ、自然学校指導員や地域計画におけるワークショップのファシリテーターを志す人々を養成してきた。著書に『人権の学びを創る―参加型学習の思想』などがある。
渡辺豊博氏：NPO法人グラウンドワーク三島、富士山クラブなど6つのNPO事務局長を歴任し、先駆的な市民活動をリードしてきた。NPO活動「水の都・三島」では、水辺自然環境の再生活動を実践し、日本水大賞、明日への環境賞、土木学会デザイン賞最優秀賞などを受賞。著書に『清流の街がよみがえった』などがある。

対談

都留の魅力と私たちの役割

—社会学科環境・コミュニティー創造専攻に就任して—

渡辺豊博（地域環境計画）

高田 研（環境教育）

社 会学科が拡充改編されて二専攻となり2年が経過しました。

そのうちの「環境・コミュニティ創造専攻」は、地域交流研究センターと深く共鳴する性格をもっており、今後両者は、実践・教育・研究において価値ある関係をもっていくことが期待されています。本特集では地域交流研究センターという角度から、「環境・コミュニティ創造専攻」がひらいている（あるいは専攻担当教員が関わっている）、重層的なフィールドに光を当てました。

巻頭の対談では、「環境・コミュニティ創造専攻」に新しく着任されたお二人に、都留という地域や都留文科大について印象とこれからの思いを語りあっていただきました。

学生たちと都留市民との濃密な関係に注目する

―都留と文大に対する印象について―
渡辺 都留に来た印象ですが、山がきれい、自然と近い。よく言われますけれども、集中して勉強するという点では非常にいい場所かなと思いますね。フィールドワーク的というと、狭くて細長いのでいろいろな教材がコンパクトに上手に配置されている場所だと思います。学校がその

ウイングのちょうど真ん中にある。扇を広げているちょうど核、ハブみたいな場所にあるともとらえられると思います。

学生は刺激もあまりないので、よそに気持ちのとられない。例えば友だち、学生同士という人間関係、あるいは地域同士、学生と地域とか、学生と先生というようなことも含めて、やや凝縮された、いい意味で閉鎖された密度の濃い関係がある。いろいろ素材があつて、多様性、重層性のあるおもしろい町なんだなあという印象です。

まだ半年しかたつていないので、全体の素材を味わっていない。もしかしたらもつと深い大きな可能性もあるのかも思います。われわれは大学人になりましたので、そういう可能性のある教育教材をこれからしっかりと発掘していかなければいけないかなあという意味でわくわくしています。

高田 僕は今まで地域カフェ（フィールドミュージアムカフェ）を3カ所でやって、地元の人らとかかわってきました。なかなか1年半では地域の文脈がまだまだ…。1年間地域に入つて、3カ所ですが、付き合えば付き合うほどまだまだ読めない部分がある。読めない部分がやつと見えてきたというところです。ここ



* 14頁と15頁に関連記事があります。

の町のおもしろさというのは、そういう読めない文脈の上に、文化と言ってもいいですけど、そういうものの上に他者がたくさんついているところにあります。地域の人は一つは(文大生に)眼ざされる、ということに対してはほかの地域とは全然違う感覚を持っていますね。大学生で、全国から集まってきた若者の目からのまなざしをいつも受けながら、かわりながら暮らしている。それで話を聞けば聞くほど、その人たちが

僕らが知らないところで僕らの数倍、学生とかかわって、これまでやってきてもらっているという話があります。

僕は自動車をときどき修理に出すんですけど、この間、おっちゃんと話していたら、今は学生とかかわっていないけど、何代もアルバイトの子が自動車工場に来ていたそうです。一番遠いところは高知県で、去年か一昨年、結婚式に奥さんと二人で行ったというんです。僕らはなか



渡辺豊博氏

なかそこまで見えていないですね。そういう関係性の中に地域があるというのをおもしろい町ですね。

渡辺 3万2000人ぐらいで3000人近くの学生がいるっていうのは、たぶんこの密度は日本一なんじゃないですかね。その意味で大学が地域経済や地域文化や地域の新しい創造的な部分でどういう役割を果たしているかという違う視点で評価したときには、日本一多様性に満ちた、地域と密着性の高い大学と言えるのではないかと思います。

それが今のように、ここの人の性格か、気持ちが大いなのか、あまり表に出したくないのか分からないけども、しっかりと根付いている。要するに我々が知らない意味での地域連携、住民連携がうまくできていて、一体性がうまく生まれているんじゃないかと思います。

高田 地域連携というか、地域混在型大学。

渡辺 そうそう、親子型というか、第二のふるさと大学みたいな。僕らも日大の学生と一緒にグラウンドワーク(*)をやっているんですね。みんな三島のグラウンドワークでかわって、おじちゃん、おばちゃんと飲んだり食ったり、いろいろな具体的な活動をして、卒業していくときに追い出しコンパみたいなのを毎年

やっているんです。そうすると、毎年この15〜16年、まったく一緒なんですよ。「初めて第二の故郷というふうに三島を感じ出した。故郷意識というのが初めて分かったし、現にそういう意識が根付いたと自分でも認識します」という発言をよくします。

高田 この間、福島県の南会津の田舎の高等学校に呼ばれて、お話しに行ってきたら、その先生がぼそと「私のお父さんは都留文科大卒業生です」と。「それで小学校の先生を山の中でやっていました。家は南会津よりもっと山の中です。そこから親父が昔、短大だった時代に出てきて、ここを卒業した。そして、2、3年前までずっと出身の子らへの大学へ送るのを先頭にたって頑張っていた」と。「ものすごい大学に対してのアイデンティティがうちの親父にはあるんです」とおっしゃるんです。それにつながっていきますよ。あんな田舎で、おもいつきり故郷なんですけれど、彼にとつてはここも故郷なんです。

渡辺 僕も経験していますよ。この間も裾野の市役所で頼まれて講演し、終わったら5人ぐらい来たんです。飲みに行くことになっていたんですか」と言うから、「なんだい」と言ったら、5人全員ここの卒業生。

*持続可能な地域社会創成を目的に、地域住民、企業、行政のパートナーシップと地域の専門組織によって推進される地域環境改善活動。静岡県三島市では、先駆的に、富士山からの湧水が減少して環境が悪化した「水の都・三島」の水辺自然環境の再生と改善を目的として、市内8つの市民団体が中心となり、市や企業の協力のもと、1992年グラウンドワーク三島実行委員会を設立、1999年にNPO法人化した。

裾野の市役所にいる都留文科大学の卒業生が来て、声かけてくれたんです。

高田 僕、大阪の中学校に勤めてたけど、同僚で都留の出身って知ってるもの。ほかのやつはこの大学出身かは知らなくても、なぜか本人がアイデンティティ持っているから、都留の出身だとしゃべるんですね。普通、大学はどこを出たなんて言わないじゃないですか。

ネットワークの広がりと深まりを見通す

— 学生と都留という地域への関わりについて —

渡辺 地域と関わるには、いろいろなやり方があると思います。用事があって入っていくのか、用事がなくて入っていくのか。私はあえて、学生は用事も無いのに入っていくって、持続可能なかわり方をつくっていくというやり方がとれないかなあと思っています。

環境とか、生きた教材としての前提条件をわれわれ大人（という大変ですけど）が、地域や行政やその他のNPO団体、地縁団体とうまく話し合いをもって、やってやれば、まさにほかの大学とは違う差別化し

た優位的な学習プログラムを大きな声で宣伝できるし、都留にとつても悪いことではない。結果的に何か形が残れば、こんなにいいことはないわけですよ。

高田 フィールドミュージアムカフェでは学生が勝手に動いているね。僕はほとんどやってないです。学生たちはおもしろいんでしょうね。実

際に地域に入り込んで人と交渉して、ゲストを決めてきてというのが、やっぱり入り込んだ子はかなりのめり込むみたいです。

僕がカフェをやるうとしたのは、基本的には、今まで今泉（吉晴）先生がずいぶん前に始められたフィールド・ミュージアム構想をかたちにしていくという一つの仕事の一段と

してやり始めたということなんです。カフェが成功するということよりも、さっき渡辺さんがおっしゃったように、やはり地域の人たちに自分たちの地域をフィールド・ミュージアムとして自覚してもらおうということですね。宝として自覚してもらおうなあなたたちをつくっていきいたいと思っっているんです。



高田 研氏

渡辺 僕自身、新しくコラボレーションのお話をしているんですけど、パートナーシップ、地域との連携とよく言うけれど、実際は一つひとつの活動がまずきちとあって、例えばカフェならカフェがあつたり、川掃除なら掃除があつて、その延長線上で今度はより効率的に、より広域的に進めようという問題意識の中からパートナーシップが出てくると思うんです。クオリティが高い。当然、行政との連携とか、商店街とか。その次として、今度はネットワークという話で、今度は人のネットワークもあるし、専門家とのネットワークもある。そういう意味で組織の多様性みたいなものが次に生まれて、ということですよ。

高田 ワーキングネットを、共同の仕事みたいなものを仕掛けていかないと動かないかなという気はしています。

渡辺 ビジネスではないけど、マネ

ジメントですね。ここの学食の終わつたあとのご飯がどのくらい残るかを循環型の授業で調べさせたいですね。そうしたら23%ぐらいご飯が残るといふことです。それを引き受けられないか。いろいろ宿題を出して調べてきたら、「いいです」ということになったんです。というのは、お金を払って捨てているから。

何をやるのかというと、小さいおむすびにしよう。一口おむすび。中にいろいろなものを入れる。聞いたから厨房の中で作ってくれるなら、使ってくださいということになったんです。「いいですよ」って。それでやってくださいという了解をもらったんです。何でもかんでも全部商売にしてしまう。小さな商売にね。

文科系の大学として地域と自然に関わる

— 都留文科大学の魅力について —

高田 これだけ当たり前で目立たない、普通の里山の景色しかないところなのに、フィールドとか、ネズミが好きとかモグラが好きとかそういうのを求めてやってくる不思議な学校ですね。もちろん今泉先生からの伝統があるから、そういうことで来るんでしょうけれど。

渡辺 結局、ほかの大学は現場がないんですよ。話は腐るほどあつても。

高田 それと文科系でそういうところがないんですよ。文系の学生なんだけれど、動物が好き。椋鳩十とかの世界です。ネイチャーライティングではないですけど、そちらのほうの角度から動物とかかわっていくというのもある。けっして動物学だから動物とかかわっていく必要はない。俳句からでもいいし、自然の見方って別に科学だけではない。

渡辺 そうですね。僕の場合、環境もやっていきますけれど、先ほどやった環境経営とか地域経営という意味合いで環境を再生し環境と共生することによって、地域も元気になるし、人も来る。経済も、という話にうまくマツチングできれば、これは一種の文科系のかかわり方になります。

高田 どちらにしろ、対象は別なんですけれど、基本的にはどうコミュニケーション能力を高めるか。いくつものものを持つていたって、人と関わりができなかったり、全体的に見る力がなかったら、結局かたにはならないわけです。

渡辺 学生を2回現場に行かせたら、みんな共通して言っているのが、「地域の人にシカトされた」。「おはようございます」と言っても、全然あいさつもしてくれない。そのあげくは

「人の土地に入るな」と怒られたとか、そう言つて怒つてるんです。

高田 いいですね、怒られるのが怒られるのは学びですからね。怒られないとダメですよ。

”地域大学院”をつくらう

— 環境・コミュニティ創造専攻の夢 —

渡辺 休耕田、耕作放棄地は、僕も車でぐるぐる周りましたけれど、おいしいですね。だつて舗装された道路のすぐ横がずうつと空いているんだもの。まいつちゃつた、僕。うろろろ写真を撮つていたら、地域のおとつあんがトラックで来て「何やってんだ」という。「いい土地が空いてるんですね」「借りたいの」「これ水掛菜にしたら、最高ですね」と言った。横にきれいな水が流れて、あれ、貸すと言つたら、大変なことになりますよ。借りられないから、会社をつくつてはどうですか。

地域経営だから、地元で、30〜40歳のちよつと手が離れた人や、高齢者でもまだ元気な人。それから全部が全部就職できないじゃないですか。研究生というわけにもいかないの、少し社会訓練というかたちでインターシップみたいなことをやる。イギリスではギャップ(*)というの

があるわけです。そういうかたちでうちが職業訓練するんです。農業という新しいスキルを教えるわけです。そういう地域大学院みたいなのをやる。

高田 そういうマインドを持つている子らがうちの学科には、いるんですよ。社会へ出る前にいっぺん自分で実験的に農業やつてみて、そこから出ていくつていいのはいいですよ。

渡辺 農業だけでなくも林業もあるじゃない。観光業だつてあるし。いろいろなものを地域大学院で学ぶ。もつと勉強したいというのなら、うちの大学院に残つてもらおう。まさに地域にとつても我々の学術的創造活動、挑戦的活動が元気の元になる。そういう一種の起爆剤になればいいですね。

(この対談は、2008年12月11日に、本学教員の前田昭彦氏、泉桂子氏、田中夏子氏の協力を得て行われました)



*ギャップ (GAP グラデュエイト・アプレンティス・プログラム) : 大学卒業生を対象とした見習い実習プログラム

プロジェクト研究



地域交流研究センターでは、地域の方々から協力をいただきながら、障害者就労支援に関わる研究と、地域の人々との学びあいを拡充する取り組みを行ってきました。具体的には、障害をもつ当事者及びその家族、支援者を含むネットワークの形成によって、立場の異なる関係者が意思疎通を深めていくことが目的です。プロジェクトにあたっては、「親の会」の皆さん、障害者通所授産施設東部授産園「みとおし」関係者、都留市社会福祉協議会、東部圏域地域療育事業関係者の皆さんより、協力、アドバイスをいただいています。とくに、東部授産園では、通常は、うどんをはじめ、クッキーづくりや農作業等、販売活動も含めて取り組んでいらっしやいます。また土曜はレクリエーション活動が実施されますが、これには本学の学生もときどき参加をさせていただいています。そんな縁で、今回は、授産園の園長さんである志村恵子さんから、最近の取り組みについてお書きいただきました。

(田中夏子)

安心して暮らせる、 共生の地域づくりをめざして

地域の中で共に暮らしたい

志村恵子

障害をもった方々が地域で安心して普通の暮らしを実現するために、障害者自立支援法が施行され2年余り。この制度には、自立した生活をする為に就労支援が含まれていますが、今は非常に厳しい状況です。

そんななか、私達の施設「みとおし」では工賃増計画ということで取り組み始めました。工賃増計画とは、今支給されている工賃（自分たちで作った「自主」製品を販売し、そこから得た収入が工賃になります）を2倍にしていこうという取り組みです。数字では簡単に見えますが、これがまた2倍販売していくということですから、とにかく大変な取り組みです。

大変ですが、努力すれば努力したなりに結果がついてきます。苦しみだけではなく、楽しみもあります。

笑い有り、涙有りで、日夜頑張っています。

地域で安心して暮らせる社会って？これも課題です。自分のもっている力を生かし、社会に貢献したい、人の役に立ちたいという希望や願いは障害の

ある無しに関わらず、皆がもっている気持ちだと思います。そんな人たちが「みとおし」には沢山居るんだということ、1人でも多くの方々に知ってもらいたい：地域の方々に理解してもらいたい：互いに助け合えることが必ずあるはずですから…。

そんな第一歩として、「みとおし」では月1〜2回土曜日にメンバー中心の企画による余暇活動を行っています。その活動を1人でも多くの地域の方々や学生さんたちに知ってもらい、一緒に体験できると素敵だなと感じます。

障害をもった方々も、日々（良い意味でも、悪い意味でも）刺激を求めています。皆さんもそんな「みとおし」のメンバーと出会ってみませんか?! 出会ったその瞬間から何かが必ず変わるはずですから…。

(しむら けいこ・東部授産園「みとおし」園長)

写真：「土曜日活動」の午前中、メンバーと学生たちとで昼食（お好み焼き）の準備

環境・コミュニティ創造専攻では、1年前期授業「フィールド体験」で都留の町の農、食、森林、まちづくり等を学んだ後、後期、学生たちが自分で企画・立案したプロジェクトを、極力自主管理方式で具体化していきます（授業名「プロジェクト研究Ⅰ」）。教員はときどき相談に乗る程度で、あとは自分たちで仲間づくり、資材の調達、活動の実施、報告書のまとめを約30時間かけて行うという授業です。チームはいくつかあるのですが、その中の一つ、「そうだ！農業をやるうin都留」チーム（総勢6人で構成）では大学の裏山の水道タンクの脇の「荒れ地」100坪程度を都留市から提供してもらい、開墾を始めました。さて、その結果は…。



耕作放棄地をよみがえらせた！

6人で開墾に挑戦

広瀬 誠、櫻井拓巳、
山岸 良、千葉 歩、
伊藤 雄、山下大輝

私たち6人のグループは後期に入り、プロジェクト研究という活動を始めました。この研究は、自らが主体となるもので、同じ目的を持ったメンバーが集まり、協力して活動を行うものです。私たちは、耕作放棄地を開墾し、畑に戻すというプロジェクトを考えました。活動はまず、土地探しから始まりました。大学の職員の方はじめ市役所の方、土地開発公社の方に協力をいただき、100坪ほどの土地を見つけたことができました。しかし、私たちが借りることになった土地は、本当に荒れ放題の土地でした。最初見たときは、とても、耕作ができる土地であるなどと思いませんでした。そこから1ヶ月かかって、6人が協力し、畑を開墾することができました。そして、畑に畝を立て、種を植えた時には、本当にうれしく思いました。荒れ放題の土地も、みんなの協力できれいになるものだという感動もありました。

今回の研究を通し、机の上での学びだけでなく、実際の現場（フィールド）で体験することによって得られるものがたくさんあるということ学びました。野菜は、気候や風土によって、種を蒔く時期や方法が異なること、また、農業をすることが、どれほど体を使う大変なことであるかということ、こうしたことを学ぶには、現場で活動をしてみるしかありません。また、農業の楽しさを実感するにも、現場体験が欠かせなかったと思います。

最終的に、今回の研究では、野菜を本格的に収穫することはできませんでしたが、種を植える時期が遅かったことが原因だと考えられます。かろうじて、大根の間引いたものは収穫する（食べる）ことができ、とてもおいしかったです。今回の反省を活かし、今春からの耕作ではおいしい野菜を収穫できるように、メンバー全員で協力し活動を継続していきます。

今回の研究を通し、机の上での学びだけでなく、実際の現場（フィールド）

（メンバー 環境・コミュニティ創造専攻1年 ひろせ まこと・さくらい たくみ・やまぎし りょう・ちは あゆむ・いとう ゆう・やました だいき）

五年目になった農業実践

ミニ水田の取り組み

西本勝美

○四年の三月末、大学職員の仲介で、

「月待ちの湯」にほど近い上戸沢の地に四五〇平米（約一三六坪）の畑地を借り受け、有機無農薬農業の実践を始めました。以来、毎年度の三年ゼミ生を中心に、学生・教員有志の参加を促しながら、少しずつ本格的な農業実践へと発展してきました。今では、季節毎の野菜と小麦、大豆、蕎麦など、年間を通して二〇品目ほど育てるようになりました。そして、五年目となる〇八年度は、「現代G.P.」の助成を受け、「大学農園整備事業」の一環として、いくつかの新しい企てを試みました。

その一つが「ミニ水田づくり」です。畑地の南西の角に、二・八メートル×一〇メートル（二八平米（約八・五坪）のミニ水田をまったく新たに造成（？）し、別の事業の「たんぼクラブ」で余った種籾から育てた苗を植え、収穫にこぎ着けました。見よう見まねの企てでしたが、学生たちと知恵を出し合いながら、G.P.予算で購入したエンジンポンプやホースリールを活用して、水入れ、代掻き、水見など悪戦苦闘の毎

日でした。

田植え、稲刈りはもちろん手植え、手刈りですが、収穫にはもっこりこだわって、はぎ掛けでの天日乾燥の後、「足踏み脱穀機」と「唐箕（とうみ）」を使用して、昔ながらの（江戸時代なみの？）脱穀作業をおこないました。収量は籾で七・三キロ。目標の一〇キロには及びませんでした。無農薬で水見も不十分だったにはまずまずの出来でしょうか。関わってくれた学生ともども、貴重な体験ができたと思います。茨城の米づくり農家出身の学生も、当然ながら「はじめての経験ばかりだった」と言っていました。

この五年の間に、市の農業リーダーに取り寄せてもらった小淵沢の小麦、都留産の大豆、十日市場の篤農家に分けていただいた冬菜や里芋など、都留・上戸沢の標高と気候に適した地場産品も種取りをして、風土固有の農業の「かたち」へと近付いています。

（にしもと かつみ・本学初等教育学科教員）

←手刈りの稲刈り



水入れと荒代掻き→



社会学科では毎年「フィールドワーク」という授業を行っています。四日以上にわたって、都留周辺で、あるいは県外に出かけて行って、それぞれの専門に関わるテーマで、関係者にインタビューをおこなったり、体験・見学をするなどして、普段、講義や文献で学んでいる事柄を、実際に学び、検証しようという取り組みです。

環境社会学関連のフィールドワークは毎年夏休みに行っています。以下は滋賀県での調査に参加した阿部麻耶さんの感想です。

滋賀県での フィールドワークを経て

阿部麻耶

私たち、3年環境社会学ゼミは、去年(2008年)の夏に3泊4日で滋賀県にて現地調査を実施しました。水班、観光班、エネルギー班に分かれて

調査を行い、私は水班に所属しました。水を悪化させている原因には、工業系排水、家庭系排水、農業系排水、自然系排水などさまざまなものがあります。そして、人間は何か物を食べなければ生きていけません。そこで、私は農業という視点から水、琵琶湖について取り組むことにしました。インターネットでの調査を進めると、滋賀県の「環境こだわり農業」というものに辿り着きました。この滋賀県の環境こだわり農業というのは、規定された基準以下の化学肥料、農薬を使用している農作物に対して「環境こだわり農産物」として認定する、というものです。ただ、単に化学肥料、農薬の使

用量を減らせば認定させるのか、というふうにはありません。そのような項目の他にも、「環境配慮技術」と呼ばれる、水田を活用した生物生息環境の保全、生き物調査や子どもたち等との交流の場の提供、農業用プラスチックの使用の削減などの項目もあります。このような取り組みで重要になってくるのは、何も農産物を生産する農家だけではなく、農家が生産した農産物を購入する消費者も重要なのです。いくら環境に負荷の少ない農産物を生産しても、その農産物の需要が低ければ市場での流通量は少なく、一般

家庭の食卓には並びにくい。したがって、「環境こだわり農業」あるいは農業は、農家だけの取り組みではないのです。これを機会に、地産地消、自分の住んでいる地域に目を向けてみては如何でしょうか。地域に対する見方も変わってくるはずです。

琵琶湖の水質は、農業以外の対策もあり、徐々に改善されています。一人ではなかなか結果が出ないようなことでも、大勢で取り組むことで自然と結果が出てくる具体例だと思います。

(あべ まや・本学社会学科3年)



「水班」の写真。右端が阿部さん



環境こだわり農業を実践している琵琶湖畔の中谷農場(撮影:阿部麻耶)

地域社会論関連のフィールドワークは毎年、二箇所（地方都市と農山村）で開催します。地方都市は、学生たちの出身地や都留市と重ね、比較しながら考えることが可能だからです。また農山村は財政難や農業の後退等、様々な問題に直面する中、学ぶべき取り組みがたくさんあるからです。2008年の「地方都市」編では、7月末の四日間、熱海市にて、地域づくりに取り組む市民団体、観光事業者、そして行政の立場から観光再生を模索する市職員の方々から「伝統的な観光地における再生と創造の取り組み―暮らしが輝くまちづくり」について学びました。また、8月の農山村編では、周辺四町村で分権的な合併を進める木曾町の開田高原地区にうかがい、合併前後で、住民自治、地域自治がどのように変化・拡充してきたかを学びました。以下は木曾開田高原調査に参加した阿久津夏季さんのレポートからのものです。



「日本で一番美しい村」の地域づくりに触れて

阿久津夏季

木曾町・開田高原地区では、地域づくりが重層的に展開していました。インタビューを通じて、第一に、行政が主導して住民に働きかける地域づくり、第二に、住民が進められている地域づくり、第三に、行政と住民の協働によって進められている地域づくりが関連しあいながら展開していることがわかりました。

第一点目として、木曾町には、他地域と比べ特徴的な地域自治組織の仕組みがあり、住民の参加をより徹底することに力が注がれています。しかし地区によっては必ずしも、地域住民に地域自治組織の存在や意義が浸透しているとは言いがたいという課題もありました。第二は、住民主導で進められている取り組みで、その一つが「おんたけ有機構想」。土づくりから農産物の加工・販売まで、厚みのある地域内循環の流れが可能となります。村の多くの人がこの事業に出資参加していると聞



き、期待の大きさが感じられました。また、開田は移住者の多い地域として著名ですが、イターン者と地元の人々の関係の構築については「がったほの会」等、住民の方々が様々な取り組みをなさっていることがうかがえました。住民同士が定期的に集まってお互いの意見を言い合ったり、地域の将来について語り合うことができる場の重要性が確認できるお話をしました。

第三は、行政・住民による協働です。開田では早期から景観条例を制定しますが、それが昨年「日本で一番美しい村」の一つに認定されるまでは、行政と住民との間で、考え方の共有をめぐるねばり強い関係づくりがあったといえます。これら重層的な地域づくりが開田の魅力を構成していることが理解できる調査でした。

（あくつ なつき・本学社会学科2年）

写真 上：木曾福島からバスでさらに一時間近く揺られ開田に到着した後、森林鉄道に乗り込んで中央：ヒアリングにご協力いただいた木曾町役場の職員の方々と学生たち（前列）

地域の森林に接する

地域交流研究センター「暮らしと仕事部門」では平成20年10月20日と12月1日の2回にわたって森林再生研修会を開催しました。第1回目は山梨県の持つ恩賜県有財産について、第2回目は学校林についてそれぞれ担当講師の先生方からお話しをうかがいました。2人の参加者から感想を寄せていただきました。

県有林の歴史を紐解く 「森林再生研修会」に参加して

山下詠子

平成20年10月20日、元県林務技監で山梨県史編纂室林業担当の有井欣也さんを招いた「森林再生研修会」が開催されました。テーマは、全国で唯一山梨県だけが持っている恩賜林(県有林)についてです。森林と人との関係性を専門に研究している私にとって、山梨県の恩賜林について現場の方のお話を聴ける滅多にない機会と思いい、参加しました。会場では、学生だけでなく都留市や近隣の方、恩賜林の地元管理団体、県職員の方など多様な方々が有井さんのお話に耳を傾けていました。

恩賜林とは、明治44年に県内にあった御料地と呼ばれる皇室の財産が、相

次ぐ大水害を機に県に下賜されたものです。県土の約三分の一の面積が恩賜林です。ただし、それらは御料地になる以前は官有地(今で言う国有地)で、その前は地域住民が薪や草などの生活・農業に必要な資材を得るために共同で使ってきた山林(入会山)でした。そのため現在は県有林ではありませんが、旧来からその山林を使っていた地元集団が森林育成や山火事の防止などの管理を行っています。

研修会で有井さんは、恩賜林がどのようにして生まれたかという経緯を、当時の歴史資料を交えて丁寧に説明してくださいました。明治維新後に全ての土地を官有地と民有地とに区分けする「官民有区分」政策が実施されたこと、県内の入会山の多くは官有地に区分されたことをめぐる県令(今でいう県知事)と国とのやりとり、それに対する地域住民の反発といった内容が説明されました。

古い文書を読み解く作業では古典の授業が思い出され、また明治時代の状況を知らない私にとって想像力が追いつかない部分もありましたが、時々織り交ぜられるエピソードには、有井さんがその時代に生きていらしたのではないかと思わせるほどの臨場感がありました。現在も恩賜林の管理に当たっておられる地元関係者は大勢いらつしやると思いますが、恩賜林が今の形に

辿り着くまでのドラマを知る人はそう多くはないかもしれません。世代交代が進むなか、歴史を伝えていくことの大切さを改めて感じました。恩賜林の分厚い歴史がまだまだ続いていく中、研修会の終了時刻が来てしまったのが心残りでしたが、是非とも今後もこのような機会が設けられたらと願っています。

(やました うたこ・本学非常勤講師・東京大学)



有井先生の熱のこもったお話がつつく



森林再生研究会に参加して

中原 智弘

私は、今回「森林再生研究会」に参加して、様々なことを学びました。そのなかには、私が初めて知ることでもたくさんありました。なので、研究会は大変勉強になり、有意義なものになりました。

竹本先生は、「学校林」を詳しくお話になりました。私は、林業について勉強しているのですが、正直に言うところ、「学校林」については、わかりませんでした。学校林と一言耳にするだけだと、「学校が所有している林」や、「学校林が教育と結びつく」とは到底思えませんでした。また、学校林自体が財産として考えられており、どこまでが学校林と詳しく言えるのかも、不思議に思いました。しかし、お話を聴くにしたがって、私なりに学校林のこれまでの歴史や、新しい学校林としての機能（環境教育・総合的な学習による活用）、具体的な学校林の活用例（小学校の卒業記念品作りや、森林整備、学校の建築材としての機能）などについて理解出来たと思います。

また、今回の森林再生研究会は、興味深いものでした。

一つ目に、「学校林は、財産目的で設置されたのにもかかわらず、所有者が学校ではないこと」です。学校林なら、学校が所有者であっても不思議ではないはずですが、一つの集落が学校を設置し、財源も確保出来るようになったわけですから、市町村が所有者と言うことは理解できます。しかし、私は、全ての所有権は市町村ではないと思います。先にも述べましたが、環境教育などに学校林が利用されているのであるとしたら、真の所有者は生徒・児童などではないでしょうか。学校林を利用する人は、市町村だけではないので、学校林の所有体系について、今後研究してみたいと思いました。

二つ目に興味深いのは、お話のなかで、「活動などが活発に行われている学校は、学校林をたくさん所有している傾向にある」と言う内容です。教育や、財産面で多く活動する為には、たくさん学校林が必要になることはわかります。ですが、多く林を所有しなくても活発なところはあります。たとえ所有している林が少なくても、うまく利用していくことは不可能ではな

いでしょう。なので、違う事例なども知りたいと思いました。

以上より、森林再生のなかの学校林を一つとつてみると、疑問がたくさん出てきました。研究会に参加したことによって、私自身の森林に対しての考えや見方も変わりました。よって、学

びの材料を得ることが出来、意欲が湧く研究会になりました。こうした研究会の開催で、私以外の多くの学生が「森林再生」について、深く学んでもらえたらと、心から思いました。

（なかほら ちひろ・本学社会学科2年）



竹本先生によるビデオを活用した講義



大月市立鳥沢小学校の学校林



フィールドミュージアムカフェ(*)は都留フィールドミュージアム構想の一角として地域に交流の時間と空間を生み出していく活動です。この度第4回のカフェが都留市内の盛里地区で行われました。その模様を二人の参加者からレポートしていただきます。

「今夜は大家族」 カフェの魅力

高柳周子

フィールドミュージアムカフェのチラシには毎回、同じ言葉が載せられている。「今夜は大家族 うたって かつて みんなでごはん」。

今回の盛里カフェでもその言葉どおり、地域のお年寄りやお父さん、お母さん世代、子どもたち、そして学生が集い、持ち寄った料理を囲んで語り合い、一緒に歌った。会場は大きなお茶の間だ。「みんなで盛里トーク」という時間を設けてあったのだが、それが始まる前から、会場にあった盛里の写真を見て「この家の造りはね、合掌造りと言って…」

「昔は家で馬を飼っていてね、ご飯をあげる時…」等々、地元の方の口から次々に魅力的な話が飛び出した。

地元の方が馴れ親しんだ盛里を語ると、語られた「モノ」、そして盛里という場所がキラキラと光を放つ。それを語る人自身も心から嬉しそうに生き生きとしている。そしてそれを聞く人たちも、目を輝かせている。これがフィ

ールドミュージアムカフェの魅力だと私は思う。その魅力の源は、「繋がり」をつくり出す力だ。モノや地域と人が繋がる。それを同じ空間で共有することで人と人が繋がる。傍から見れば「大家族の団らん」だが、ひとたびその家族の一員になると、自分を取り巻くその「繋がり」が心を満たし、何だかよくわからないワクワク感まで連れてきてくれることに気付くはずだ。

カフェのパワーは当日だけにとどまらない。スタッフであった私は、準備段階から地域の方と話をしたり、暖かい応援を頂いたりする中で「繋がり」の力を実感していた。この力は途切れることなく、次のカフェへと繋がっていきはすだ。

このカフェの扉はいつでも、誰にでも開いている。あなたも遊びに来てみませんか？

(たかやなぎ ちかこ・本学初等教育学科4年)

*『地域交流センター通信』13号を参照してください。



小さなカフェ

竹内華純

フィールド・ミュージアム・カフェとは不思議な空間だ。過去四回とも、参加者は一品おかず持ち寄りで、地元の話をしたり、アーティストを呼んでライブを聴いたりといった基本的スタイルは同じだが、毎回全然違うものが出来る。

開催場所を決めるきっかけも毎回異なる。今回の場合、発端は盛里在住のシンガー・しらいみちよさんが前回カフェに参加してくださったことだった。

しらいさんの所属するアバンコーポレーションの方々とも相談し合い、試行錯誤しながら作り上げていったのが今回のカフェである。

会場の中にも今までにない空間を作り上げた。竹を組んで作った大がかりな照明も、アバンの方々との合作だ。また会場が寒そうということから、公民館の床に畳を敷いた。きっかけは「じゃあ、畳敷いちゃう？」というスタッフの一言で、都留の畳屋さんから廃棄処分予定の畳をいただいた。これが昭和28年に建てられたというレトロな畳屋さんで、ご主人と奥さんが「ちよっと上がっていきなよ」と、食べ

きれないほどのお餅や干し柿を下さった。そしてそのまま2時間ほど楽しく語り合ってしまった。

こういった人とのつながり、交流——まさに、小さなカフェを積み重ねていくことで誕生するのがフィールド・ミュージアム・カフェである。

確かに準備は大変だ。地元の方にも最初は怪訝な顔をされたりして、理解して頂くために何回も足を運ぶ。それが実らないこともある。しかし、準備段階で毎回新しいドラマが生まれるのがカフェの醍醐味であり、私が魅力を感じて「カフェはやめられない！」と思う理由でもある。本番では参加者の皆さんに「来て良かった！」「またここでカフェ開催してね！」という感想を毎回のように頂く。本当にありがたい限りだ。

カフェが私を育ててくれた。地域は人を育て、人は地域を育てる。私は今年で卒業だが、行く先々で、小さなカフェaをやり続けていこうと思う。

(たけうち かすみ・本学大学院社会学地域社会
研究専攻2年)

県民コミュニティカレッジ講座

”自然の力“をまちの力に

県民コミュニティカレッジは地域交流研究センターがNPO大学コンソーシアムやまなしと協力して開催する公開講座です。今年度は「”自然の力“をまちの力に」と題して、「土・水・風・森・木」を活用したまちづくり、環境づくりをメインテーマとしました。お二人の参加者から感想を寄せていただきました。

第一回：10月9日（木）

「土の力」のつなぎ方 — 食の有機的なリサイクルシステムを目指して

第二回：10月16日（木）

「水の力」が市民を結ぶ — 水環境をめぐるグラウンドワークを通して市民力を醸成した物語

第三回：10月30日（木）

「風の力」で村をつくる — 自然エネルギーを活用したまちづくり

第四回：11月13日（木）

「森の力」がまちを守る — 水資源または環境保全としての森と人の関係

第五回：11月20日（木）

「木の力」が子どもを育てる — 木育・森林環境教育のススメ

リサイクルシステムの可能性を学ぶ

一木則子

富士河口湖町にあるカントリーレークシステムズ代表、田村孝次さんを講師に迎え、「土の力」のつなぎ方

食の有機的なリサイクルシステムを目指して—aをテーマに都留文科大学の5回シリーズの講座の第1回が開講

されました（平成20年10月9日）。

この講座は大学で開講されながら、受講者は一般市民、学生でもだれでもOKということで、もちろん学生も何かいきましたが、自治体関係の方や白髪交じりの年配の方、スーツ姿のサラリーマン風の方など、様々な年代の方が入り混じり、普段同世代の人たちの中で学んでいる私としては、不思議な感覚もありましたが、同時に良い刺激ももたらえたような気がします。

講義では、講師の田村さんが専務理事を務める富士河口湖町のNPO法人フィールドズが展開する、同町内の宿泊施設などから出る残飯を分解し、飼料・肥料として再利用する「食品残渣リサイクル計画」に関する実体験や苦労、地域ぐるみの取り組みやその仕組みなど、貴重なお話を聞くことができました。

食の安心、安全が叫ばれる現代、このような仕組み作りはまさに地域から必要とされていることなのではないでしょうか。とくに河口湖町は有数の観光地ということでホテルや旅館が数多くあり、それらから出される生ごみの量は相当なものなのでしょう。河口湖町にかぎらず、私の現在住んでいる都留市も含め、多くの自治体は高額な処理費用をかけて生ごみを燃えるごみとして焼却処理しています。（生ごみは水分を多く含んでいて、重量があるう

えに焼却するとき熱温度を下げてしまいます。）食品残渣リサイクルシステムが成功すれば、自治体は高額なごみ処理費用を節減でき、地域住民の方々は有機野菜を食べることができそうです。ごみの分別は手間がかかるし面倒ですが、その先に得られるものは皆にとつて良いことばかり。諸事情により、現在の計画はストップしてしまっているのですが、いずれまた再開し、自治体を超えて他の地域にまで浸透していけば、すばらしいことだと思います。

循環型システムは、地域内のつながり、地域間のつながりをさらに深めることが出来る、そんな可能性も秘めているのではないかと、思いました。

（いちきのりこ・本学社会学科2年）



「水の力」が市民を結ぶ 講師・渡辺豊博先生の講座を受講して

中澤弘樹

南アルプス市では、新エネルギー利用促進事業として自然環境保全と地域資源を活用するため、水を利用した「ミニ水力発電所」の整備を進めています。

「水の力」をテーマとしての係わりから、今後のまちづくりの参考とした気持ちがあり、この講座を受講しました。

講義では、イギリスで始まったグラウンドワークの手法を活用し、市民力

を醸成し、市民参加のまちづくりが行われた先進事例と経験を取り上げた貴重なものでした。

まちづくりは、行政と地域住民、企業等、横の連携による事業実施が非常に重要といわれますが、縦割り、とよくいわれる行政は、事業の進め方に様々な問題を抱えています。

講義の一部で、行政主導で事業を実施した場合、住民、地域との協議が少

ないため民意が反映しきれず、そのまま事業が実施されてしまう傾向があるということを知りました。

また、事業費について、行政が行う事業に比べ、NPOの呼びかけ努力によるグラウンドワーク、住民、企業を巻き込んだ事業実施のほうが、経費が安くできるという話もありました。

現在各自治体は、財政が非常に厳しく、限られた財源でより有効で効率的な事業を行うため、住民ニーズに対応した事業の中から、さらに選択した事業しか実施できない状況にあります。

今後、より一層民意を反映した事業を進めていくためには、地域に根付いた調整役のNPOの担う役割は非常に重要であり、事業選択、企画・運営に

についても、人脈を形成し組織づくりされたNPOと行政がタイアップして事業推進していくことが大切である、ということを感じました。

渡辺先生は、行政にも携わっていたこともあり、行政における問題点、行政の住民、地域、NPO、企業等の係わり合いかた、また、それぞれの責任による協働でのまちづくりをすすめていくことの大切さ、を具体的な事例により講義して下さいました。

大変、新鮮で興味のある講義でした。

(なかざわ ひろき・南アルプス市在住)



Topix 1

第5回

地域交流研究フォーラム が開催されました

都留文科大 地域交流研究センターとH19年度文部科学省現代GP採択課題「山・里・町をつなぐ実践的環境教育への取り組み」ようこそフィールド・ミュージアムへ」主催の第五回地域交流研究フォーラムが開催されました。

2009年2月21日(土) 10時~16時

会場：2号館 101教室、102教室、ロビー、屋外

「都留文科大における環境教育の取組について」(三つの実践報告)、「大学生や地域の方による展示・交流」(13企画)、「みんなで語ろう！環境教育 私たちがめざすもの」(全体集会)の三部によって構成され、77名の参加者がありました。



地域交流研究フォーラムに参加して

後藤 敬

第五回地域交流研究フォーラムに参加しました。当日の資料の冒頭に、「今回のフォーラムでは、地域の自然、農、暮らし、文化、歴史にスポットをあて、都留文科大が地域の方々とともに進めている取り組みや、地域に根ざした先進的でユニークな活動を紹介します」と書いてありました。

午前の部の大きなテーマは、都留文科大における環境教育の取組みについてでした。生物学が専門の坂田有紀子先生の概要説明に続いて、三名の方から活動報告が行われました。いずれも公立大学の特色を生かした取組みであることに感心し、将来学校教育の現場で活躍できる人材育成がその根底になっていると思いました。

私は、市が「都留市自治基本条例」を制定してつよく推進している、協働のまちづくりa事業の三吉地区(おおむね谷村第二小学校の校区)推進会リーダーを努めています。主要事業の一つである「三吉子ども体験教室」との協働では、都留文科大生に助けられながら活動して、実績を重ねています。

自然環境保護の部門では、都留市及び山梨県土木部との三者で環境ボランティア推進事業に関する合意書を取り交わして、08年度は菅野川のごみ収集と草刈作業を二回実施しました。また、2月15日には、坂田先生、一柳英隆先生、及び学生六名をお招きして、「地域の美しい自然環境を守る講演会」を開くことができました。内容は、絶滅が心配されているカジカとカワラナデシコの都留市内における生態調査に関するものでした。今後、カワラナデシコを呼び戻す活動につなげていきたいと願っています。

フォーラムでの午後の部の全体集会では、環境問題を考えるときに一番大きな壁になっているものは何かという課題について、歌手として活躍されているしみみちよさんは、「心」だと答えられていました。心が容易に伝わっていないもどかしさが、協働のまちづくりを進める上でも大きな壁になっていることを痛感している今、しらいさんから一つの真理を教えられた思いがしました。

フィールド・ミュージアム活動の継続と今後のご発展を期待しています。



つながるフィールドミュージアム

二部奈々緒

よく、環境教育というと、遙か遠くのアマゾンの森が一日に東京ドーム何個分消えているとか、実感しづらいことばかり教わってきた気がする。テレビで南極の水が融けるのを見ている間に、近所で大木が切り倒され、山が削られ、古民家が壊され、小さな店が閉店する。そういうことはどうすればいいのだろう？地球規模のことも当然重要なだけけれど、それ以前にもっと目を向けるべきことがあるのでは、と感じていた。

フィールドミュージアムはその思いに答えをくれた。人類の罪を糾弾するだけではなく、身近な地域の自然と人や文化も含めて関心を持つ。その考えに非常に共感した。そして、それは人をつなぐ場にもなっている。

西本先生から、変人aと絶賛されていたしらいさんは、私も出会い、「こんなことを生活丸ごとでやってる人がいる！」と新鮮な驚きだった。同じ女性として、こんな生き方もあるのだと心打たれた。立場から物を言う方の多い中、しらいさんのおっしゃる「主人公」の話は、体当たりで実践してきた方の実感がこもっていて、やさしい強さを感じた。

色んな話を聞き、色んな人が色んなことを思う。全体集会ではペアを作ること、その意見を交換することができ、とても貴重で創造的な機会となった。でも、もっとペアになった方とも話したかったし、他の方の意見も聞いてみたかった。2時間では物足りないくらいだった。

仕事とか子どもとか家事とかを言い訳にして、何もできないでいる私には、報告される取り組みはどれも活き活きとしていて羨ましくなる。何かを始める時、どうやったら形にしていけるのかが知りたくて、質問をした。実際には物事順調にはいかない。しかし、個人で完結させずに積極的に話し合うことで次第に形になる。大学にはその環境があるのだと感じた。

構成も内容もフォーラム全体を通じて、人、場所、取り組みなどを「つなぐ」ことが実現されていた。次回も何に出会えるのか楽しみにしている。

(にべななお 大月市在住)

Topix 2

第2回特色GP（*）フォーラム「地域を基盤にした教師教育改革―フィンランドと日本」が開催されました。
2008年11月8〜9日（2101教室）

フィンランド教育を 丁寧に見つめ学びあおう

鶴田清司

題を解決するための一つの試みであり、むしろ日本の先進的な教育実践や授業研究に学びたいと語っていた。どこの国でも問題は同じである。巷のフィンランド言説を鵜呑みにせず、教育の本質を見据えていきたいと思った。

それにしても、ハッカライネン氏、ブレディクト氏（実は夫妻である）ともに大変に気さくな人柄で、好感が持てた。今回の来学に対して深く感謝するとともに、都留文科大学とオウル大学カヤー二校との研究・教育上の交流がさらに進展することを期待したい。

アウトする子どもは確実にいること、こうした負の部分には関わらないで、学力調査の成績をあげることに腐心する教師もいること、実際、PISA（OECD生徒の学習到達度調査）の成績は高いけれども、学習意欲・動機の面で問題のある子どもも多いことなどである。「ナラティヴ・ラーニング」の提唱も、こうした問

第2回教師教育フォーラムが11月8日（土）・9日（金）に開催された。今回のテーマは、「地域を基盤とした教師教育改革―フィンランドと日本」。学力の高さで注目を集めているフィンランドから、ペンティ・ハッカライネン氏（オウル大学カヤー二校）、ミルダ・ブレディクト氏（同）を招いて、国際的な研究フォーラムが実現した。ハッカライネン氏は、近年、「ナラティヴ・ラーニング（narrative learning）」を提唱して、日本でも注目されるようになった研究者である。それは、劇化活動などにおける子どもの役割演技や共同製作における語り合いに注目して、内発的動機を高めながら知識を構成・創出していくというプロジェクト型学習の一つである。

これも大変に面白かったが、それ以上に興味深かったのは、フィンランド教育の実態に関する話であった。いま、日本ではフィンランド教育は非常に美化して語られている。しかし、ハッカライネン氏によれば、必ずしも樂觀できない状況であるという。最近、学校で生徒による銃撃事件が起こったばかりだが、あれほどの大事件でないにしても、いじめや差別が引き金になつて起こる事件や非行が少なくないとのことだった。遅れた子どもへの補習教育は充実しているが、ドロツ



*平成19年度文部科学省・大学基準協会の「特色GP」特色ある大学教育支援プログラムに採択された「地域を基盤とした教師養成教育モデルの開発―学習支援を通して〈子ども体験〉の深化をめざす学生アシスタント・ティーチャー・プログラム」

（つるた せいじ・本学初等教育学科教員）

「開く」ことに関する 「質の転換」

—フォーラムに参加して—

牧田秀昭

「地域を基盤とした教師教育改革」の福井大学教職大学院拠点校の一事例として至民中学校の取組を簡単に紹介する機会を得た。とくに今年度の移転開校ということもあって、モデル的に昨年度から大学と協働研究を進めていること、新しい学校は「時間」「空間」を著しく変化させたもので、「組織」と「記録」がそれを支えていることを報告した。授業改革が学校改革の核になっていること、生徒も教師も協働性が重視されていることに関心が集まっていたように思う。

フィンランドの報告では、必ずしもPISAで1位になったことを楽観視しているのではなく、むしろ子どもの学習意欲は芳しくないことから、子どもも学生もナラティブな学習を取り入れていること、都留文科大学の報告では、教育実践の全体的な力を培うために、S A T (Student Assistant Teacher) の活動をベースにしたカンファレンスやゼミナール、論文作成などを含む長期的展望に立つ臨床教育学のカリキュラム構築など、リアルタイムでの方向性が示されて参考になった。

さて、このフォーラム全体を通じて、福井と同じ方向性を示していると感じたことがある。それは「開く」こと、概念崩しについてである。「地域に開く」こと、「問いを開く」こと、この両面で語られていたように思う。



「地域に開く」ことは、学びのcontents(*)として、テキストに頼るのではなく、自分たちが生きていく地域の文化活動や実際の生活などのリソースをいかに取り上げるかが重要だということである。動機付けも明確になり、多様な人材が関わることで協働性も生まれ、その中で自己決定がなされていく活動が展開され、関わりの中でナラティブなストーリーテラーになり得る。

さらに「問いを開く」ことについて、ミルダ・ブレディクト氏の「答えが分からないことを若い世代に示し、一緒に考えていくことを進めていく必要がある」、田中孝彦氏の、「研究論文の効率的産出に目を奪われ、



既成の概念や方法を安直に押しつけることは自戒すべきなどの発言に顕著に表れていた。「問い」を「問い」として返ししながら協働追求する中で、自己決定をアシストしていくというスタイルが求められているのであり、まさに福井の取組そのものであると感じたのである。

教育は元来開かれたものなのだろうが、「学級王国」という言葉でも明らかのように、実際の学校現場ではなかなか難しい。「授業公開」「学校公開」すら多大なエネルギーが必要になるし、教師が「分からない」とは言いづらいであろう。その要因は、教師が外部から評価(ランク付け)される、監視・管理されているという観念が支配していることによると思われる。既存の概念の枠を徐々に広げていくというマイナーチェンジではなく、「開く」ことにどれだけの意味があるかの捉え直しが重要であり、これが福井市至民中学校の学校改革で狙っている「質の転換」であると考える。

(まだだ ひであき・福井市至民中学校教諭 福井大学教職大学院客員
准教授)

*内容

Topix 3

クリニクラウンとこども もう一度、学ぶ志をもった理由

塚原成幸

皆さんは臨床道化師、あるいはクリニクラウンという言葉を知っていますか？

臨床道化師（クリニクラウン）は、入院しているこどものもとを定期的に訪問し、遊びとユーモアを届け、こどもがこども本来の生きる力を取りもどし、笑顔になれる環境づくりに寄与する道化師です。私は今から4年前に、クリニクラウンの養成と派遣を行なうNPO法人「日本クリニクラウン協会」を大阪で設立しま

した。

もともと十数年プロの道化師として、全国各地の劇場や学校などで舞台の仕事をしていましたが、1995年に起きた阪神・淡路大震災の復興支援活動に従事したことをきっかけに、道化師の本質は、舞台上から作品を観客に投げかけるだけではなく、自らが地域や人の暮らしに関心をもち、笑顔を与えるのではなく、一人一人がもっている笑顔の力を引き出すことが社会的な使命だと感じるようになりました。そして、本来笑顔があれば、もつとその空間がいっき輝くのはどこだろう？と考えた末、医療と教育の現場にこそ、道化師は活動の場を求めている必要があると思うようになりました。やがて、気がつくとも毎日のように各地の小児病棟で、こどもとコミュニケーションを取っている自分がいました。それは、舞台の上から作品を発信するのではなく、闘病生活を送るこどもと心を通わせることに全神経を集中する道化師の姿でした。

活動を始めた当初、訝しげに私たちの行動を見ていた医療関係者も、徐々にこどもの表情の変化から、笑いやユーモアが闘病意欲を高めることに有効であるこ

とに対して関心を示すようになり、今では多くの医療施設から派遣要請が寄せられるようになりました。

ただ、一見順調に見える活動も続ければ続けた分だけ、どうしても避けることのできない失意の出来事が起きます。それが、かかわってきたこどもたちが旅立って（亡くなる）いくという臨床現場の現実です。今から2年前、長年かかわってきたこどもが相次いで小児がんで亡くなりました。私にとってその子の存在は、クリニクラウンを続けてきたなかでもとても大きな存在でした。ただ、かかわりのなかで、小さな身体で、自らの命と向き合う、こどもの気持ちの本質がつかめていない自分がいたのも事実でした。そこで、私は道化師として、もつとこどもの理解を深めなくては、真の臨床道化師にはなれないと思い、昨年の春よりかねてから「臨床教育懇話会」などでご縁のあった都留文科大学大学院で、臨床教育実践学を学ぶことを決意したのです。

もうすぐ、都留に来て一年が経過しようとしています。私は、大学に入りあらためて「人は学びたい時が、学ぶ時」だと実感しました。これからも私は、困難な状況でもけっして生きることをあきらめない子ども理解を深めていくために、この研究を続けたいと思います。

（つかはら しげゆき・本学大学院臨床教育実践学専攻、日本クリニクラウン協会事務局兼芸術監督、臨床道化師）



二人一組で、子どもと心を通わせて遊びます



新しい遠隔交流授業の実施

東桂小学校と宝小学校を結ぶ

杉本光司



昨年度から都留文科大学地域交流研究センターの取り組みの一つとして組み込まれました。「地域情報教育」プログラムも、これまで、都留第二中学校と大学、東桂小学校と大学を結んで遠隔教育授業・交流プログラムを実施してきました。そして、今年度は地域交流研究センターの備品設置支援として、宝小学校に遠隔交流機器を設置いたしました。

そこで、今年度はこれまでのような、大学と接続したプログラムではなく、東桂小学校と宝小学校を結んだ、初めての小学校遠隔交流プログラムを平成21年2月13日（金）午後4時から実施しました。今回は第一回目ということもあり、お互いの児童会役員による学校紹介を行いました。

プログラムは、それぞれの自

己紹介から始まり、はじめに宝小学校での児童会活動について説明を行いました。宝小学校では『笑顔いっぱい、元気いっぱい、友達いっぱい宝小』のテーマのもとで、「あいさつ運動」、「たてわり班活動」、「ボランティア活動」についての実績が報告され、それに対して、東桂小学校からは、それぞれの取り組みにおける成果や内容、また「あいさつリーダー」についても質問が寄せられました。

続いて、東桂小学校からは、『元気いっぱい！思いやりのある東桂小児童会』のテーマのもとで、「元気よく体を動かそう」、「思いやりの心をもって行動しよう」、「きれいな学校にしよう」という目標について、それぞれの具体的な活動について報告されました。宝小学校からも、取り組んだ内容や成果、「運動会に地域のお年寄りを招待した」方法について、また、「ゴミレンジャー隊」への質問が寄せられました。

初めての小学校間を結んだ交流プログラムでしたが、「緊張したけど楽しかった」、「ビックリした」、「もっといっぱいほしい」などの感想も寄せられ、今後の継続的な活用についても期待が寄せられました。

（すぎもと てるじ・本学情報センター教員）

地域教育相談室の第2回公開講座が
2008年11月27日に開催されました。

公開講座

「ピンチをチャンスに変える教師と
保護者の関係づくり」に参加して

遠田将大



分かりません。そんなときにこの講演会があることを知ったのです。

講演会では、学級経営が難しい学校は保護者との関係づくりも難しいことや、昔は教師が無条件に信頼されていく時代であること、そして保護者が何を望んでいるかに合わせて、教師が柔軟に対応を変えていく必要があることなどを話していただきました。何かあつ

私は教育実習先で、以前に比べて保護者との関係づくりが難しくなつたという話を聞き、保護者への対応の仕方について学ぶ必要性を感じました。しかし、

実際にはどのような学べばよいのか

たときに対応するという受身的な対応だけでなく、保護者のニーズや不満を早期に理解し教師の側から働きかけていく積極的な対応が必要であることが分かりました。

河村先生の講演の中で最もありがたかったのは保護者とかかわるときの具体的な手順を教えていただいたことです。4つのステップに整理された対応の手順やその根拠、対応する際の留意点には、その前に教えていただいた保護者の心理と関連付けてなるほどと納得しました。

とくに手順1で紹介された「くのように受け取られたのでしたら、不自信をもたれるのはわかります。ただ、こちらの認識と違う点がありますので、状況を確認させてください」という言い方は、保護者の怒りを受け止めつつ、事実を確認し問題解決に持っていく上で有効だと感じました。今、さつと言えるように練習しています。

この他にも、教師として知っておくと役立つ情報やすぐに使える技術をたくさん紹介していただきました。

講演会と言うとつい堅苦しいイメージをもってしまふ私ですが、今回の講演は深刻なテーマなのにところどころに笑いがあり、あつという間の90分でした。教師として保護者と関わることに對する不安も少し和らいだような気がします。

これからも、このような講演会があればぜひ参加したいです。ありがとうございました。

(えんた まさひろ・本学初等教育学科4年)



Topix 6

第11回

山梨県南都留地域教育フォーラム

主催 南都留地域教育推進連絡協議会
富士・東部教育事務所

山梨県教育委員会

テーマ 「子ども達の教育は地域全体で担う」

～みんなで育む地域連携・地域交流～

日時 2008年10月31日 午後1時30分より

会場 富士吉田市立下吉田第二小学校



「南都留地域教育フォーラム」 に参加して

志村 武寛

今回、PTA活動の一環として、この「南都留地域教育フォーラム」に参加する機会を得ることができました。

前半のアトラクションでは、都留文科大学合唱団、総勢二十四名の迫力ある美しいメロディーと洗練されたハーモニーに感動し、感動経験が少なく感受性の乏しいと言われる現代の子どもたちにも、この美しい合唱を聞かせたいと思うと共に、地域に根ざした音楽教育活動の質の高さを実感致しました。

後半の分科会では、第四分科会（テーマ「高校生の見た地域の発見」）に参加しました。一つめの提案は、北稜高等学校の生徒が取組んだ「月江寺ルネサンス計画」という地域商店街の再活性化計画です。二つめは桂高等学校の生徒による「でたらめを許さない学校体制」という学校と地域との関わりから自分たちの生活を見直す取り組みです。何れも地域に学び、地域の良さを再認識する、高校生らしい素晴らしい取り組みでし

た。

一つ目の提案に対しては参加者からいくつかの意見やアドバイスがありました。どれも生徒たちの純粋な活動を後押しする前向きな発言ばかりでした。私も二つ目の提案に対して「生徒会が自主的に清掃活動に取組み、その姿を地域の皆さんが目当たりして一緒に参加する、学校と地域が一体となった素晴らしい活動なので是非継続して欲しい。」と賞賛の言葉を贈らせていただきました。

最後に、助言者の都留文科大学教授田中夏子先生から、「活性化という目標は掲げるのではなく、あくまでも副産物として捉えることが大切で（住みやすい町）をどう創るかという視点に立つて考え実現していくことが大切である。」「聞く力をどう育てるのか、聞く力を育てることで地域の方の声を聞くことができる。」「いずれにしても今後のこの地域を担う高校生の頼もしい提案であった。」など、専門的な立場での講評があり、改めて、地域で教育を考えること、地域で子どもを育てることの大切さを学ぶことができました。

（しむら たけひろ・都留市立東桂中学校PTA会長）

Topix 7

地域のボランティア活動要請と学生たちボランティア関連サークルとをつなぐ交流の場がつけられました。

文大ボランティアアひるば くだれでもどうぞぞく

森嶋美子

平成20年度から新たに、地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会と連携して、「文大ボランティアアひるば」くだれでもどうぞぞく」を、毎月第4水曜日午後6時15分から3号館409教室で開いています。

地域では、学生ボランティアを求めるニーズや文大生との交流を求める場面が多々あります。学生、大学、地域がつながりあえる場が欲しいとかねてから模索し、試行錯誤を繰り返してきましたが、ようやく地域交流研究センターの協力をいただき、このひろばを開くことが実現しました。

当初は、大学内のボランティアグループ・市民活動団体、社協の職員で近況報告、ボランティア情報の共有、意見交換など行なっていました。回を重ねるなか、皆で協働しあえる何かを始めようと、ペットボトルのキャップを集めて世界の子どもたちにワクチンを届ける活動に賛同し、大学内5箇所回収ボックスを設置し活動を展開しています。最近では、地域住民や町の商店関係者、福祉施設の方が参加してくださり、徐々に交流の輪が広がっています。

この「ひろば」へ来れば、地域の幅広い情報をタイムリーに共有でき、それぞれのもつ問題解決が図られ夢が実現できるような、そんな創造性と活力に満ちた場となり、学生、大学、地域それぞれの活性化が進むことを願っています。

以下は参加者の感想です

【ソサエティ】

大学内での交友関係が広がりました。大学のボランティア関係サークル同士が顔をあわせることは、これまでになかったことです。この会で何度も顔を合わせる人とは、校内ですれ違ふときには挨拶を交わすようにもなりました。

この会に参加しお互いの近況（ボランティア活動内容）を報告しあうことで、新たな活動意欲も生まれま

す。お互いにとつていい刺激となっていると思います。

また、サークルに在籍するだけでは得られないボランティア情報を得られる有意義な時間となっています。今後はサークルソサエティのメンバーとして、この会の方針を先輩に伝え、気軽に参加してもらいたいと思っています。そして、未永くこの会が続くボランティア活動に興味を持つ人が増えたらいいなと思います。

【つくしの会】

いつも和やかで、楽しいムードのこの会へみなさん来てみませんか！

この都留市でいたいこと、実現したいことがある人たちの力になりたい。この溢れ出るパワーを都留市のために使いたい。僕たちはそんな想いで集まっています。みなさんと会えるのを楽しみに待っています！

【つる子どもまつり事務局】

月一回、普段はあまり接触のない他のボランティア団体の方とお話ができ、とても刺激を受けています。団体や学生と市民という枠をこえて協力し、地域をよくよくする活動をしたいと考えています。

【上原さん（谷村地区ボランティアコーディネーター）】
学生諸君また都留市民の皆様、学生と市民との関わりの中で、こんな窓口があるのをご存知ですか？市民ボランティアの立場から言わせて戴きますと、実に学生諸君は一生懸命ボランティアに取り組んでいます。4年間の大学生活のなかで実社会と関わりをもち、都留市での自分の存在を形にして残そうとしている。この素晴らしい学生時代は、今後歳月を重ねる毎にいろいろな場面で役に立つことと思います。もっと多くの学生にも参加して欲しいと願っております。

（もりしま よしこ・都留市社会福祉協議会、地域福祉活動コーディネーター）



Topix 8

フィールド・ミュージアムとの 連携事業の取り組みと 富士急行線沿線活性化について

石井謙一

大月から河口湖を結ぶ富士急行線は自動車の普及等より、昭和43年のピーク時から輸送人員は半分以下に減少しており、鉄道事業は非常に厳しい状況であります。そのなかで、鉄道利用を増やすために沿線地域の自然や文化などの観光資源を発掘し情報発信することで、観光客を増やし地域の活性化による鉄道利用を促進してきました。そして、平成20年10月から都留文科

大学のご協力のもと社団法人日本民営鉄道協会との合
同で、大学が展開するフィールド・ミュージアム構想に連携した富士急行線の地域沿線活性化事業を推進していくことになりました。従来から都留文科大学前駅において、大学の地域交流研究センターの学生さんによる地域の自然情報のパネル展示やビオトープの設置などを実施してきましたが、これを拡大して地域の沿線活性化に取り組んでいく計画です。

大学の地域交流研究センターと連携し、都留文科大

学前駅をフィールド・ミュージアムの情報発信基地として待合室を中心に整備します。都留や富士急行線沿線における自然や文化の情報をあらゆるツールで発信できるものとし、観光客や地域住民に駅を利用していただき、駅から大学や都留の街、山里等を歩いて自然や文化などに触れ合い、学び、体験し、感じてもらうのが目的です。平成21年度は学生さんと弊社との間で、駅からスタートする自然観察ツアーやイベントを実施し、最終的には富士急行線を利用して都留へ訪れる観光客や地域住民の方を増加させたいと思っています。

鉄道事業は地域の利潤と事業の利潤が一致すると思えます。鉄道の利用者が増え、その駅にたくさんの方が降りればその地域は活性化し、また地域が活性化すれば鉄道も活性化すると考えています。つまり地域と鉄道は共存しているのです。

大月から都留を経て河口湖まで26・6kmの富士急行線。そこには以前学生が取材し『フィールド・ノート』(※)で紹介されたように、住民も知らないその地域の自然や歴史、文化などのあらゆる観光資源がたくさん眠っています。今後、それぞれの地域の皆さまと我々鉄道事業者が手を組んで、如何にしてその資源を活用し試行錯誤し商品化し情報発信していくかが大切であると考えます。これを推進していくことで富士急行線沿線地域への観光客等が増加し、街や山里を歩く人が増えていくよう、沿線地域と富士急行線の活性化を進めていきたいと思えます。

(いしいけんいち・富士急行株式会社交通事業部鉄道担当)

*都留文科大学地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門の機関誌。



Topix 9

地域交流研究センター が開講する授業



ワイン資料館

「地域交流研究Ⅲ」は山梨県観光部観光振興課の「山梨魅力メッセンジャー事業」とタイアップした講義です。これは学生の皆さんに県内の第一線で活躍されている外部講師をお招きしての座学と県内各地をめぐるフィールドワークから構成されています。講義のねらいは山梨を題材としながら地域を読み解く目を養い、さらに卒業後も学生の皆さんがメッセンジャーとして県の魅力を内外に伝えていただくことにあります。受講者の感想を寄せていただきました。(泉桂子)

地域交流研究Ⅲ

講義から教わり、 足の裏から学ぶ山梨

山口 周

私は、「座学」と「フィールドワーク」で構成された本講義を聴講することで、今まで気付くことのなかった山梨県の魅力にたくさん触れることができたと思います。講義では「座学」として、山梨県内で活躍されている各界の方々が、毎回興味深い資料とともに山梨についてお話をして下さいました。山梨の自然について学んだ回では、とても小さいネズミが生息していることや、真っ赤

でも美味しいキノコがあることを教わりました。講義と言ってもただお話を聴くだけでなく、富士山の地下から汲み上げた水や甲州ワインを試飲したり、鹿の角やモグラの剥製に触れたりと体験する機会が多くあり、とても印象に残るものとなりました。映像資料や写真を使っただけだと学習できたことは、「座学」の良さの一つであったと思います。

2 回行われた「フィールドワーク」では、それぞれ郡内と国中を中心に、山梨の歴史や風土、産業を伝えるさまざまな施設や公園を巡りました。富士山の麓に位置する環境科学研究所では、アカマツ林を散策しながらコケ

から林ができるまでの過程を教わり、自然の強さを感じました。また、昔の人々が水害と闘ってきた歴史を、博物館の展示物からだけでなく実際の堤防跡からも見ることができました。海のない山梨ならではの川魚の水族館があることには大変驚きました。「フィールドワーク」では、まだまだ自分の知らない魅力ある「山梨」がたくさんあることに気付くことができたと思います。

私は本講義において、「座学」で得たものを自分なりに「フィールドワーク」で生かすことができたと思います。貴重な話を聴いただけで終わらせることなく、得た予備知識を使って施設を巡ることができました。異なる分野から招かれた講師の方とは、毎回1時間半弱のお付き合ひしかできませんでしたが、しかし、さまざまな切り口から「山梨」を深く知ることができ、日に日に自分が山梨に暮らすことを誇りに思うようになりました。

(やまくち あまね・本学比較文化学科4年)



1903年に開通した大日影トンネル（現在は遊歩道）

地域交流研究Ⅳ

本年度後期の「地域交流研究Ⅳ」では、「地域の人と自然の交流」をテーマとした冊子編集に取り組みました。受講生は31名で、1年生から4年生まで全学科からの受講がありました。地域の人への取材、それをもとにした記事の作成、校正といった一連の編集作業のうち冊子を110部製本し、取材でお世話になったかたがたに配布しました。この頁では、この授業を受講した学生に感想を記してもらいます。(北垣憲仁)

「伝える」ことの 素晴らしさを学ぶ

鈴木紀子

社会学科の私は講義形式の授業がとても多かったのですが、先生の話をもただ聞くだけの授業には飽き飽きしていました。そこで何か面白い授業はないかと思ひ先輩に聞いてみたところ、この授業を勧められました。それがこの授業をとることになってきたきっかけです。授業内容も読んでみて、地域の人にインタビューして記事を書くなんて面白そうだし、人と話すことも文章を



書くことも得意分野なので、きっとそれを活かすことができる…。そう思つてこの授業をとることに決めました。

けれど、いざ授業が始まってみると、インタビューした内容を記事に起こすという作業は思つていた以上に難しいものでした。何度かグループの人相手にインタビューの練習をしましたが、私は短い時間のなかで記事の構成を考えてから質問をするということが出来ず、行き当たりばつたりに質問しては記事にまとめられないということがほとんど。得意だと思つていたことが思うようにならず、練習の度に悔しい思いをしました。

結局インタビューのコツを掴めないまま練習は終わり、いよいよ地域の人に話を聞きに行くことになりました。練習の時のように、せつかく聞いたことを上手く記事に出来なかつたらどうしよう、とても不安でしたが、同じ失敗を繰り返さない為にも、今回は行く前にしっかりと質問したいことを整理しました。私がインタビューしたのは、「ちゃんこ両国」の店主、亀田さん。この授業は、普段からよく見かけてはいるものの、話しかける機会がなかなか無い人と話せるいいきっかけにもなりました。

少し緊張気味にインタビューを始めたものの、亀田さんの人柄と、事前の準備があったからか余裕を持つて話を聞くことが出来ました。すると、自然に話が広がっていき、インタビューするのがいつの間にか楽しくなっていました。亀田さんは記事のテーマである「子どもの頃の遊び」だけでなく、当時の都留の様子や、自分の人生など詳しく話して聞かせてくれました。亀田さんの温かい人柄や雰囲気、お店のにおい、インタビューを終えた後に食べたうどんの美味しさ…。全てを読者に伝えたいと思ひ、五感をフル稼働して夢中

で記事を書き上げました。私はこの授業を通して、インタビューの難しさと楽しさ、自分の作品を人に読んでもらえることの喜び、そして何より「伝える」ということの素晴らしさを学ぶことが出来ました。この貴重な経験をこれからの将来に活かしていきたいです。雑誌が出来たら真っ先に亀田さんのところに持って行きたいと思ひます。

(すずき のりこ・本学社会学科1年)



第13回市民第九演奏会に寄せて

2008年12月21日(日) 午後2時開演

第13回

市民第九演奏会の感想

澤田洋一

今回も多くの方々の御支援、御協力を戴いて、恒例の「2008第13回市民第九演奏会」を無事、盛会に開催することが出来ました。これも偏(ひとえ)に都

留市はもとより、都の杜「うぐいすホール」のスタッフの方々、そして都留文科大学の管弦楽団を主体に集まったOB、地域の方々や都留市合唱連盟を主体に県内外から参加された合唱愛好家のみなさん(総勢250余名)のおかげです。勿論第九の前に演奏される、毎年恒例の「うぐいす音楽塾」のリコーダーのアンサンブルも多くのファンを魅了しました。

ここで御紹介申しあげますが、県内、県外の合唱愛好家は、遠くは、埼玉、神奈川、東京方面や甲府市、笛吹市、山梨市、甲州市、大月市、上野原市、富士吉田市、身延、市川大門、忍野、山中、富士河口湖、鳴沢、西桂の各市町村から駆けつけてくれました。それに全国的にも珍しいことですが、都留市は人口約3万2千余りの都市で500名近い合唱人口を持つているのです。全国的に合唱人口は千人に一人の割合、たそう

ですから、それから見ると都留市は32余名ですよね。それがなんと、都留市民合唱団、都留女声合唱団「泉」、田原伸寿会、宝コーラス、桂コーラス、ピリィヴ、土声会、アコール、富士桜コーラス、ベリィタ、ひまわり幼稚園、コロソレイユ、都留文科大学合唱団、はもーる城北、あじさいの会、青藍コーラス、ROSE、青葉会、都留シルバークーラス、男声合唱団コールベア、コール大輪、コーラス風、それに秋山コーラスさわらび、それに西桂コーラスが加わって、24団体もの大きな連盟を形成しているのです。

この団体が都留市合唱連盟の毎年の都留市合唱祭でコーラスを発表しているのですから、団員にとっては合唱の頂点にあるベートーヴェンの第九の合唱に憧れるのは当然の経過、だと思われま。平成八年、時あたかも都留市でこの都の杜「うぐいすホール」が創設され、こけら落としに多くの市民がステージに立てる曲としてこの第九を演奏したわけですが、今回13回を数えました。

この第九の合唱は、私にとりましては、昭和29年の甲府市北中学校体育館での演奏を皮切りに、都留市での13回の演奏を含め、40回目となります。記念すべきステージとなりました。不思議なことにこんなに回数を重ねても更に歌いたい気持ちは変わるどころか、歌う毎にベートーヴェンの偉大さの更なる発見があるのです。そして歌う度に偉大なものに接する感動と感激があり、それは何物にも代え難いものです。

甲府市から合唱団に来て歌ってくれたS氏が私に送ってくれた年賀状に、「昨年の都留の〈第九〉は実に素晴らしく楽しいもので、小生の〈第九〉コンサートのおかげで特筆すべきものでした」と思いが記されてありました。更にS氏は、「これは同じ都留文科大学の管弦楽団と同じ都留市合唱連盟を主体としていること、もつと素晴らしいことは、はじめから指揮者吉田悟先生が係わり、回を重ねていること、こうしたことによってこのように崇高な第九を演奏することが出来たのではないか」と述べていました。

増してのこと、会場で聴いて戴いた皆さまも同じように感動された第九演奏会であったと思います。ただ大切なことは、美しく流れる音楽、そして会場一杯に響きわたる音楽は、その場に足を運び耳をそばだてねば、この感動は伝わらないのです。

この「うぐいすホール」で第九を更に歌い続けて、より多くの方々にベートーヴェンの真髄を伝えていきたいと思ひますし、また、「うぐいすホール」や都留市にはそうした伝統をつないでいく重要な役目があると思ひています。

(さわだ よういち・市民第九演奏会実行委員会、実行委員長)

第九は一年のしめくり

新津利子

早いもので都留市の第九も13回目を迎えました。

第一回目の演奏会では20年ぶりに歌う第九に声が出ず四苦八苦。

2回目3回目は指揮者の吉田先生のご指示も少しず

つ理解できるように、5回目辺りからはご指示もどうにかこなせるように。

7回目くらいからは余裕も出て、ベートーベンが願ったように私も世界平和を願って歌うことができるようになった。

しかし、ここ数年はちよつと変化が…。4年前はその年に亡くなった父のことを思い出しながら、また昨年は苦しみながらも自らの命をたつてしまった知人と可愛かった愛犬を、また今年は頑張ったけどガンという病気に勝てず天国へ召された同級生のことを思い出しながら歌いました。

私にとつての「第九」は1年の締めくくりというだけでなく、1年間に亡くなった方たちへのレクイエムでもあるのです。

今年もいろいろあつたけど、やつと第九で年が越えました。

(にいつ としこ・都留市在住)

学生として第九演奏会に参加する

鈴木舞子

市民第九演奏会：三百人近くの人が、偉大なるベートーベンの「第九a」という世界的に有名な大曲を都留で演奏するという大きな行事に初めて参加してから三年目。合奏するたびに新しい発見があり、また普段には一緒にいる機会のない合唱やソリストも入り、回を経る毎に「第九a」の魅力にますます引きつけられていきます。

いつもお世話になってる都留市の方々と一緒に舞台に立てることは初めて都留に来たときは想像もしていなかった。故郷を離れ一人で都留に来てからは、音楽aで大勢の人たちと繋がることのできているんだと、とても嬉しく思いました。

今年で十三回目を迎えた演奏会に私が参加できたのは三回というほんの一部です。その三年という月日も自分にとつては長いものでした。そのため十三回と

いう言葉に都留市第九の歴史の長さを感じました。そんな重大行事に一演奏者として参加できたことは、私の大学生活だけでなく、人生のなかで大変貴重な経験となりました。これから先も毎年12月に「うぐいすホール」から歓喜の歌が響き渡ることと思います。

(すずき まいこ・本学国文学科3年、都留文科大学管弦楽団)



編集後記

○社会科学が拡充再編されて「現代社会専攻」「環境・コミュニティ創造専攻」(環コミ)の2専攻編成になり2年が経過しました。本号は、その「環コミ」がひらくフィールドを特集しました。森林再生というテーマを含め、地域・環境に向かう視点とフィールドが多彩になり、関係する学生・教員の層が厚くなりました。渡辺豊博氏と高田研氏との巻頭対談では、都留と大学についての印象とともに、新たな関わりへの思いが熱く語られています。

○特色G Pの第2回フォーラム(20～21頁)は、福井大学やフィンランドの研究者をお招きしての国際交流です。本号のお二人の感想でもフィンランドの“PISA 1位”を一面的に礼賛することは正しくないと言われています。そういう一面化によって日本の教育を“学力競争”に巻き込むような動向には慎重でなければならないということでしょう。

○「文大ボランティアひろば」(26頁)がスタートしました。地域からの要請と学生たちの意欲との交流の場づくりということですが、学生たちをボランティアに「動員」することにならないよう、彼等の自主性を大事にしましょうと申し合わせているということです。

○市民第九演奏会(30～31頁)には都留文科大学の管弦楽団や合唱団も参加していますが、澤田氏が紹介する都留市の合唱団・合唱人口の多さには驚きます。都留市民の文化活動のゆたかさは、合唱に限らないように思います。

○本号では、執筆者の複数の方が、このセンター通信のイメージのことを思ってください、編集部で選択するようにと二つの原稿を準備してくださいました。この通信が多くの方の心からなるご支援によって発行できていることを改めて思います。

○地域交流研究センター事業(および関連実践)が豊富なものになり、この地域交流センター通信の編集組織も強化していく必要性が生まれました。それで本年度から副編集長を置くこととなり、泉桂子氏がその任を務めています。

○おおたか大田堯先生(都留文科大学元学長)が、埼玉県の見沼をフィールド・ミュージアムとして構想しようと多方面に呼びかけておられます。次号では、フィールド・ミュージアムの交流の可能性を考えてみたいと思います。

(編集長・畑潤)



絵・成瀬洋平(なるせ ようへい・本学比較文化学科卒業生)